

受難週 月曜日 日替わり部分

早 課

【六段の聖詠】 【大連禱】 のあと

【アリルイヤ】

輔祭 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

輔祭 (第一句) 我夜中我が^{たましい}に^{まじ}て爾を慕へり、^{あまた}農より我が中心にて爾を尋ねん。

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

輔祭 (第二句) 爾の審判が地に行はるる時、世に居る者は義を學ぶ。

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

輔祭 (第三句) 火は爾の敵を^{くは}まん。

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

輔祭 (第四句) 主よ、爾已に^{たみ}を増し、已に^{たみ}を増して、己の光榮を顯せり。



アリル — — イヤ、アリルイヤ、 アリル — — イヤ

アリルイヤのあと、聖三讃詞の代わり



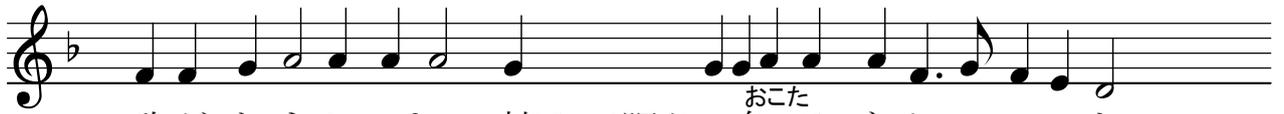
み はなむ こ や はん
視よ、新 郎 は 夜半にきた — — — る



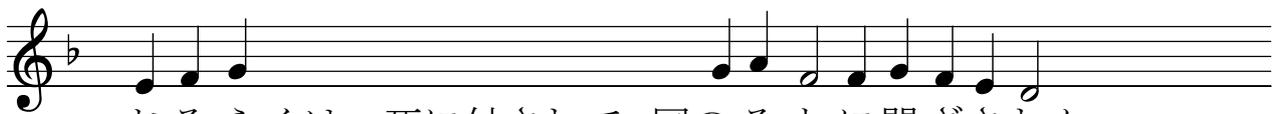
ぼく さ
僕の醒むるを見ば、僕は さいわいな — — — り、



その^う倦むを見ば、 当たらざるものな — — — り。



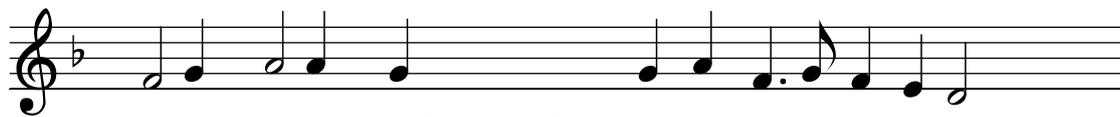
我がたましいは、 慎みて眠り ^{おこた}怠る なか — — — れ、



おそらくは、死に付されて 国のそとに閉ざされん。



疾く起きて 呼―――べ、



せい せい 聖なるかな わがか――みよ



生―神女によりて、我等をあわれみたま―え

「光栄は」「今も」のあとトロパリを繰り返す。(ティピコンでは3回だが、『受難週略』では2回)

<そのままカフィズマへ>

◆第四「カフィズマ」

第二十四聖詠

しゅ なんじ わ たましい あ わ かみ なんじ たの われ よよ はじ わ てき われ
主よ、爾に我が靈を擧ぐ。吾が神よ、爾を恃む、我に世世愧なからしめよ、我が敵を我

か よろこ なか およ なんじ たの もの はじ たま みだり ほう おか もの ねが
に勝ちて喜ばしむる母れ。凡そ爾を恃む者にも愧なからしめ給へ、妄に法を犯す者は願は

はじ え しゅ われ なんじ みち しめ われ なんじ みち おし われ なんじ しんり みちび
くは愧を得ん。主よ、我に爾の道を示し、我に爾の路を訓へよ。我を爾の眞理に導きて、

われ おし たま けだしなんじ わ すくい かみ われ ひび なんじ たの しゅ なんじ めぐみ なんじ
我を訓へ給へ、蓋爾は我が救の神なり、我日々に爾を恃めり。主よ、爾の鴻恩と爾の

あわれみ きおく けだしこ えいえん わ わか とき つみ あやまち きおく なか しゅ
慈憐とを記憶せよ、蓋是れ永遠よりあるなり。我が少き時の罪と過とを記憶する母れ、主

なんじ いつくしみ よ なんじ あわれみ もつ われ きおく しゅ じん ぎ ゆえ ざいにん
よ、爾の仁慈に依り、爾の慈憐を以て、我を記憶せよ。主は仁なり、義なり、故に罪人に

みち おし しめ けんそん もの ぎ みちび けんそん もの おのれ みち おし およ しゅ みち そのやく その
道を訓へ示す、謙遜の者を義に導き、謙遜の者に己の道を教ふ。凡そ主の道は、其約と其

けいし まも もの あ じれん しんじつ しゅ なんじ な よ わ つみ ゆる たま そのおい
啓示とを守る者に在りて慈憐なり、眞實なり。主よ爾の名に因りて我が罪を赦し給へ、其大

もつ たれ しゅ おそ ひと しゅ これ えら みち しめ かれ たましい ふく お
なるを以てなり。誰か主を畏るる人たる、主は之に擇ぶべき道を示さん。彼の靈は福に居

り、彼の裔は地を嗣が^{かれ すえ ち つ}ん。主の奥義は彼を畏るる者に属し、彼は其約を以て之に^{しゅ おうぎ かれ おそ もの ぞく かれ そのやく もつ これ あらわ}顯す。我が

目常に主を仰ぐ、其我が足を網より出すに^{めつね しゅ あお そのわ あし あみ いだ よ われ かえり われ あわれ われひとり くる}因る。我を顧み、我を憐め、我獨にして苦し

めらるるに^{よ わ ころ}因る。我が心の憂益多し、我が苦難より我を引き出せ、我が困苦、我が勞瘁

を顧み、我が^{かえり わ もろもろ つみ ゆる たま わ てき み なん おお かれら われ うら うらみ なん はなはだ}諸の罪を赦し給へ。我が敵を見よ、何ぞ多き、彼等が我を怨む恨は何ぞ甚

しき。我が^{わ たましい まも われ すく わ なんじ お たのみ はじ たま ねが むてん}靈を護りて我を救ひ、我が爾に於ける恃に愧なからしめ給へ。願はくは無玷

と義とは我を護らん、我爾を恃めば^{ぎ われ まも われなんじ たの かみ そのもろもろ うれい すく たま}なり。神よ、イズライリを其諸の憂より救ひ給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す。

(詠) 今も何時も世世に、「アミン」。

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

主憐めよ。三次、光榮は父と子と聖神に歸す。

誦經者の「光榮は」に続いて

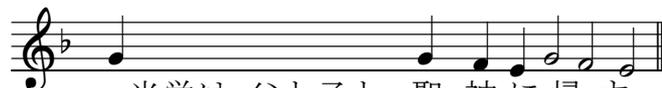


今も何時も世世にアミン ア ril イヤ、ア ril イヤ ア ril イヤ

3回



神よ光榮は なんじに 歸す 主 憐れめ 主憐れめ主憐れめよ、



光榮は 父と子と 聖神に歸す

誦經者の「今も」に続く

誦經、今も何時も世世に、「アミン」。

第二十七聖詠

主よ、我爾に呼ぶ、^{しゅ われなんじ よ われ かため わ たため もだ なか おそ なんじもだ われ はか くだ もの}我の防固よ、我が爲に黙す母れ、恐らくは爾黙さば、我は墓に下る者

の如く^{ごと}ならん。我が爾に呼び、我が手を舉げて爾の聖殿に向ふ時、我が^{わ なんじ よ わ て あ なんじ せい でん わか とき わ いのり こえ き い}禱の聲を聆き納れ

給へ。我を悪者及び不義を行ふ者、^{たま われ あくしやおよ ふぎ おこな もの すなわちそのとなり わへい かた そのころ あ いだ もの とも ほろぼ}即其隣と和平を語り、其心に悪を懐く者と偕に滅

す母れ。彼等の所爲、^{なか かれら しわざ かれら あ おこない したが これ むく かれら て な ところ したが これ}彼等の悪しき行に循ひて之に報い、彼等の手の作す所に循ひて之

に報い、^{むく かれら う ところ もつ これ あた かれら しゅ おこな ところ しゅ て な ところ}彼等の受くべき所を以て之に與へよ。彼等は主の行ふ所と、主の手の作す所と

かえり 顧みざるによりて、主は彼等を敗り、彼等を建てざらん。主は崇め讃めらる。かれすで わ

いのり 祈の聲を聆き納れたればなり。主は我が力、我が盾なり、我が心彼を頼みしに、かれわれ たす

けたり、我が心は歡べり、我歌を以て彼を讃め揚げん。主は其民の力なり、其膏つけら

れし者の救の衛なり。爾の民を救ひ、爾の業に福を降し、之を牧し、之を世に世に挙げ給

へ。

こうえい ちち こ せいしん き
光榮は父と子と聖神に歸す。

(詠) 今も何時も世に、「アミン」。<同上>

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す。

誦經 今も何時も世に、「アミン」。

第三十一聖詠

ふほう ゆる つみ おお ひと さいわい しゅ つみ き そのしん いつわり ひと さいわい
不法を赦され、罪を蔽われたる人は福なり。主が罪を歸せず、其神に譎なき人は福な

り。われもだ とき わ しゅうじつ さまよい よ わ ほねふる けだしなんじ て ちゅうやおも われ くら
り。我黙しし時、我が終日の呻吟に因りて、我が骨古びたり、蓋爾の手は晝夜重く我に加

はり、我が潤澤の消えしこと夏の早に於けるが如し。然れども我我が罪を爾に顯し、我が

ふほう かく されい われい わ つみ しゅ つうこく なんじすなわち わ つみ とが われ のぞ
不法を隠さざりき、我謂へり、我が罪を主に痛告すと、爾乃我が罪の咎を我より除けり。

これ よ もろもろ ぎじん べんぎ とき おい なんじ いの そのときたいすい あふれ くれ およ なんじ
此に縁りて 諸の義人は便宜の時に於て爾に禱らん、其時大水の溢は彼に及ばざらん。爾

は我の旃幃なり、爾は我を憂より護り、我を救の喜にて環らす。○我爾を教へん、爾

に行くべき路を示さん、爾を導かん、我が目爾を顧みん。爾等は、轡と鑣とを以て

くち つか なんじ したが むち うま うさぎうま ごと なか あくしゃ うれいおお
口を束ねて爾に従はしむる、無知なる馬と驢との如くなる母れ。○悪者には憂多し、

しゅ たの もの あわれみこれ めぐ ぎじん しゅ ため よろこ たの ころ なお もの みないわ
主を侍む者は 憐之を環る。義人よ、主の爲に喜び樂しめ、心の直き者よ、皆祝へ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

「アリュイヤ」「アリュイヤ」「アリュイヤ」、^{かみ}神よ、^{こうえい}光榮は^{なんじ}爾に^き歸す。三次

^{しゅあわれ}主 憐めよ。三次

坐誦讚詞 第一調

^{このひ}當日 ^{とうと}尊 ^{くるしみ}き ^{すくい}苦 ^{ほどこ}は ^{ひかり}救 ^{ごと}を ^よ施 ^{かがや}す ^{けだし}光 ^{じんじ}の ^よ如 ^{くるしみ}く ^う世 ^うに ^う輝 ^うく、^う蓋 ^うハ ^うリ ^うス ^うト ^うス ^うは ^う仁 ^う慈 ^うに ^う因 ^うり ^うて ^う苦 ^うを受け

^{ため}ん ^{きた}爲 ^{ばんゆう}に ^そて ^{たも}る ^{もの}、^{あま}萬 ^き有 ^のを ^{ひと}其 ^{すく}手 ^{ため}に ^{ため}保 ^{ため}つ ^{ため}者 ^{ため}は ^{ため}甘 ^{ため}ん ^{ため}じ ^{ため}て ^{ため}木 ^{ため}に ^{ため}伸 ^{ため}べ ^{ため}ら ^{ため}る、^{ため}人 ^{ため}を ^{ため}救 ^{ため}はん ^{ため}爲 ^{ため}なり。

—続けて—

輔祭 ^{われら}我等 ^{せいふくいんきょう}に ^き聖 ^{たま}福 ^{しゅかみ}音 ^{いの}經 ^{いの}を ^{いの}聽 ^{いの}く ^{いの}を ^{いの}賜 ^{いの}ふ ^{いの}を ^{いの}主 ^{いの}神 ^{いの}に ^{いの}禱 ^{いの}らん。 (詠) 主憐めよ。三次

輔祭 ^{えいち}睿智、^{つつし}肅 ^たみて ^{せい}立て、^{せい}聖 ^{せい}福 ^{せい}音 ^{せい}經 ^{せい}を ^{せい}聽 ^{せい}く ^{せい}べ ^{せい}し。

司祭 衆人に平安。 (詠) 爾の神[°]にも。

司祭、マトフェイに因る聖福音經の讀。

(詠) 主よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

輔祭 ^{つつし}謹 ^きみて ^き聽 ^きく ^きべ ^きし。 二十一章十八至四十三節

司祭 ^か彼の ^{とき}時 ^{まち}イ ^{かえ}イ ^{ときう}ス ^{みち}城 ^{かたわら}に ^{ひとつ}返 ^{いちじく}る ^あ時 ^み飢 ^{これ}え ^{ちか}たり。 ^{ちか}道 ^{ちか}の ^{ちか}旁 ^{ちか}に ^{ちか}一 ^{ちか}の ^{ちか}無 ^{ちか}花 ^{ちか}果 ^{ちか}樹 ^{ちか}の ^{ちか}在 ^{ちか}る ^{ちか}を ^{ちか}見 ^{ちか}て、^{ちか}之 ^{ちか}に ^{ちか}近

^{ちか}づ ^{ちか}き ^{ちか}し ^{ちか}に、^{ちか}一 ^{ちか}も ^{ちか}得 ^{ちか}る ^{ちか}所 ^{ちか}な ^{ちか}し、^{ちか}惟 ^{ちか}葉 ^{ちか}あ ^{ちか}る ^{ちか}の ^{ちか}み、^{ちか}乃 ^{ちか}之 ^{ちか}に ^{ちか}謂 ^{ちか}ふ、^{ちか}今 ^{ちか}よ ^{ちか}り ^{ちか}後 ^{ちか}永 ^{ちか}く ^{ちか}果 ^{ちか}を ^{ちか}結 ^{ちか}ば ^{ちか}ざ ^{ちか}れ、

^{ちか}無 ^{ちか}花 ^{ちか}果 ^{ちか}樹 ^{ちか}立 ^{ちか}に ^{ちか}枯 ^{ちか}れ ^{ちか}たり。 ^{ちか}門 ^{ちか}徒 ^{ちか}之 ^{ちか}を ^{ちか}見 ^{ちか}て、^{ちか}奇 ^{ちか}と ^{ちか}して ^{ちか}曰 ^{ちか}へ ^{ちか}り、^{ちか}無 ^{ちか}花 ^{ちか}果 ^{ちか}樹 ^{ちか}何 ^{ちか}ぞ ^{ちか}立 ^{ちか}に ^{ちか}枯 ^{ちか}れ ^{ちか}たる。

イイスス答へて彼等に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、爾等若し信ありて疑はずば、唯

無花果樹に於ける事を行はんのみならず、乃此の山に、移りて海に投ぜよと、云ふとも亦

成らん。且凡そ祈祷の時信じて求むる所は悉く之を得ん。彼が殿に來りて教ふる時、司祭

諸長と民の長老等と彼に就きて曰へり、爾何の權を以て是を行ふか、誰か爾に此の權を

與へたる。イイスス答へて彼等に謂へり、我も亦一言爾等に問はん、若し之を我に語げば、

我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げん。イオアンの洗禮は爰よりせしか、天よりか、

抑そも人もよりか。彼等かれら竊ひそかに議ぎして曰いへり、若しも天てんよりと云いはば、爾等なんじら何ぞ彼かれを信しんぜざりしと云いはん、若しも人ひとよりと云いはば我等われら民たみを畏おそる、蓋けだ皆しみイオアンを以もつて預言者よげんしゃとするなり。遂ついにイイススに答こたへて曰いへり、知らず。彼も亦また之これに謂いへり、我われも何なにの權けんを以もつて是これを行おこなふを爾等なんじらに語つげざらん。然れども爾等なんじら如何いかに意おもふか、或人あるひとに二人ふたりの子こあり、其第一そのだいいちの者ものに就つきて曰いへり、子よ、往ゆきて、今日こんにち我が葡萄園ぶどうえんに工こう作さくせよ。彼答かれこたへて曰いへり、我欲われほつせず、然れども後悔しかいて往ゆけり。又第二まただいにの者ものに就つきて、是かくの如ごとく言いひしに、彼答かれこたへて曰いへり、主しゅよ、我往われゆく、而して往ゆかざりき。二人ふたりの中孰うちたれか父ちちの旨むねを行おこなひたる。曰いわく、第一だいいちの者ものなり。イイスス彼等かれらに謂いふ、我誠われまことに爾等なんじらに語つぐ、税吏ぜいりと娼妓しょうぎとは爾等なんじらに先さきだちて、神かみの國くにに往ゆく。蓋けだイオアン義ぎの道みちを以もつて爾等なんじらに來きたりしに、爾等なんじら彼かれを信しんぜざりき、然れども税吏ぜいりと娼妓しょうぎとは彼かれを信しんぜり、爾等なんじらは之これを見みたる後のちも、仍なお悔くいず、又彼またかれを信しんぜず。爾等なんじら復また一ひとつの譬たとえを聽きけ、家主かじゅあり、葡萄園ぶどうえんを樹うえ之これに籬まがきを環めぐらし、其中そのうちに酒槽さかぶねを掘ほり、塔ものみを建たて、之これを園丁えんていに託たくして、他方たほうに往ゆけり。果期みのりどき近づちかきたれば、彼かれは其果そのみを収おさめん爲ために、諸僕しよぼくを園丁えんていに遣つかししに、園丁えんていは其僕そのぼくを執とらへて、或者あるものを扑うち、或者あるものを殺ころし、或者あるものを石いしにて撃うてり。復また他たの僕ぼくを先さきより多おほく遣つかししに、之これにも是かくの如ごとく行おこなへり。遂ついに己おのれの子こを彼等かれらに遣つかして曰いへり、我が子わこに愧はぢんと。然れども園丁えんてい子こを見みて、相語あいかたりて曰いへり、此れ嗣子こよつぎなり、往ゆきて、彼かれを殺ころして其嗣業そのしぎょうを取とらん。乃すなわち彼かれを執とらへて葡萄園ぶどうえんの外そとに曳ひき出いだして殺ころせり。然らば葡萄園ぶどうえんの主しゅ來きたらん時とき、何なにをか此この園丁えんていに行おこなはん。彼等かれら曰いわく此この悪あしき者ものを情なさけなく滅ほろぼし、葡萄園ぶどうえんを以もつて他たの園丁えんてい、即すなわち時ときに及およびて彼かれに果みを収おさめん者ものに託たくせん。イイスス彼等かれらに謂いふ、爾等なんじらは聖書せいしょに、工師こうしが棄すてたる石いしは屋隅おくぐうの首石しゅせきと爲なれり、此れ主この成しゅす所ところにして、我等われらの目めに奇異きいなりとすと、云いふを未いまだ嘗かつて讀よまざりし

か。故に我爾等に語ぐ、神の國は爾等より奪はれて、其果を結ぶ民に與へられん。

(詠) 主よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

→戻る 13頁「50聖詠」

<50聖詠、主憐れめよ12回に続いて>

◆カノン。聖コスマの作 第二調

第一歌頌。「イルモス」

己の神聖なる命を以て渉られぬ、濤たつ海を涸らし、イズライリ民を導きて馮せしめし主に歌はん、彼嚴に光榮を顯したればなり。

附誦 我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

神の言の降臨は言ひ難し、蓋ハリストスは神にして亦人なり、彼が己の神たるを僭ふ

とせざることは、僕の貌に在りて其門徒に之を示す、彼嚴に光榮を顯したればなり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

我甘んじてアダムの貌を衣たる造成主、神性に富める者は、貧しくなりたるアダムに自ら

役せん爲に來り、神性を以て苦に與らざる者は彼の贖として我が生命を捐てん爲に來れり。

(詠)【イルモス】己の神聖なる命を以て渉られぬ、濤たつ海を涸らし、イズライリ民を導きて馮せしめし主に歌はん、彼嚴に光榮を顯したればなり。

第1歌頌

おのれの 神聖なる命を 以て

渉られぬ、濤たつ海を 涸ら し、

イズライリ民を導きかちわたりさせし主にうたわん、

彼嚴かに光榮を 顯し給へばなり。

小連続へ

【小聯禱】

輔祭 我等復又安和にして主に禱らん。 (詠) 主憐めよ。

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。 (詠) 主憐めよ。

輔祭至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。 (詠) 主爾に

司祭高声 蓋爾は平安の王、及び我が靈の救主なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に。 (詠) 「アミン」

【小讚詞】 第八調

誦經 イアコフはイオシフを亡ひて哭けるに、高德の者は車に坐して、王の如くに敬はれたり、蓋彼の時エギプトの婦の慾に服役せずして、人の心を知りて不朽の冠を賜ふ者より榮せられたり。

同讚詞

我等は今啼に啼を加へ、涙を流してイアコフと偕にイオシフの爲に泣かん、彼は常に記憶すべき貞潔なる者なり、體にて役せられ、靈を服役せざる者として守り、遂に全エギプトを宰る者と爲れり、蓋神は其諸僕に不朽の冠を賜ふ。

第八歌頌「イルモス」

夫く燃されたる烈しき火は敬虔なる少者の靈に合へる玷なき體に懼れて退けり、盛なる焰の衰へし時息めざる歌は歌はれたり、悉くの造物は手を歌ひて萬世に讚め揚げよ。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

救世主は苦に往く時其友に言ふ、若し爾等我が誠を守らば、其時皆爾等が我が門徒たるを知らん、爾等互に及び衆人に和平を有ち、又謙卑の思を以て高に登れ、且我が主なるを識りて、歌ひて萬世に讚め揚げよ。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

けいてい うち しゆ なんじら ぞく いほう ならい われ ぶん たら われ しょかつ じゆう
兄弟の中に主たることは爾等に属せざる異邦の習にして、我の分に非ず、我の所轄は自由

のぞみ ゆえ なんじら うちたにん とうと ほつ もの しゅうじん しも かつわれ しゆ
の望なり、故に爾等の中他人より尊からんと欲する者は衆人の下たるべし、且我の主な

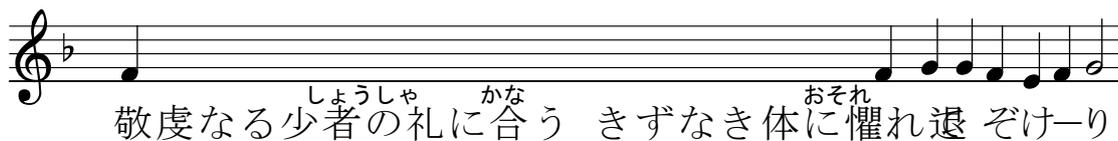
るを識りて、歌ひて萬世に讃め揚げよ。

(詠) 我等主を讃め、崇め、伏し拜みて、世世に歌ひ讃めん。

「イルモス」大く燃されたる烈しき火は敬虔なる少者の靈に合へる玷なき體に懼れて退けり、盛なる
焰の衰へし時息めざる歌は歌はれたり、悉くの造物は手を歌ひて萬世に讃め揚げよ。



第8歌頌イルモス



第九歌頌。「イルモス」

ハリストスよ、爾を生みし生神女を爾大なる者と爲せり、蓋吾が造物主よ、爾は我等の罪過を贖はん爲に、我
等と均しき肉體を彼より取り給へり、我等萬族彼を讃美して、爾を崇め讃む。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

ばんゆう えいち なんじ しとら よげん い しょうく けがれ ことごと す かみ くに かな えいめい
萬有の睿智よ、爾は使徒等に預言して曰へり、諸慾の汚を悉く棄てて、神の國に適ふ睿明

ちしき う しか なんじら こ くに うち こうえい え ひ かがや
の知識を受けよ、然らば爾等此の國の内に光榮を獲て、日よりも輝かん。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

主よ、爾は門徒に言へり、我を見て、思を高きに驚する勿れ、乃謙卑に順へ、我が飲む

所の爵は、爾等之を飲め、然せば我と偕に父の國に在りて光榮を獲ん。

(詠) 「イルモス」ハリストスよ、爾を生みし生神女を爾大なる者と爲せり、蓋吾が造物主よ、爾は我等の罪過を贖はん爲に、我等と均しき肉體を彼より取り給へり、我等萬族彼を讚美して、爾を崇め讃む。

<戻る 16頁>

第9歌頌イルモス

ハリネスよ、爾を生みし生神女を、爾大いなる者と
なせーり、 蓋 我が造物主よ、
爾は我等の罪過を贖わんためーに、
我等と均しき肉體を彼より取りたまえり、
我等萬族彼を讚美して爾を あがめ讃む。

【小聯禱】

輔祭 我等復又安和にして主に禱らん。

(詠) 主憐めよ。

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

輔祭至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭高声 蓋爾は平安の王、及び我が靈の救主なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」

<続いて以下のエクサポスティラリ>

我が救世主よ、我爾の飾りたる宮を見れども、
 之に入るらん為に衣ころもを持たず、光をほどこすものよ、
 我がたましい衣ころもを照らして、われをすくいたまへ。

〈「天より主を讃め揚げよ・・・民の榮を高くせり」のあと〉

◆^{かみ}神を^{そのせいしょ}其聖所に^ほ讃め^あ揚げよ、^{かれ}彼を^{そのゆうりよく}其有力の^{おおぞら}穹蒼に^ほ讃め^あ揚げよ。

自調の讃頌 第一調

句 ^{そのけん}其權能に^よ依りて^{かれ}彼を^ほ讃め^あ揚げよ、^{そのいとおごそか}其至嚴なるに^よ依りて^{かれ}彼を^ほ讃め^あ揚げよ。

^{しゅ}主は^{じゆう}自由の^{くるしみ}苦に^ゆ往く時、^{とき}途中^{とちゆう}使徒等に^{しと}謂へり、^い視よ、^み我等^{われら}イエルサリムに^{のぼ}上る、^{ひと}人の子は

^{わた}付されん、^{かれ}彼を^さ指して^{しる}録されしが^{ごと}如しと。^{きた}來りて、^{われら}我等も^{きよ}潔められたる^{おもい}思を^{もつ}以て^{かれ}彼と^{とも}偕に行

^きき、^{とも}偕に^{じゆうじか}十字架に^{てい}釘せられ、^{かれ}彼の^{ため}爲に^{せじょう}世上の^{いつらく}逸樂に^し死なん、^{しか}然らば^{われら}我等^{かれ}彼と^{とも}偕に^{またい}復活きて、

^{かれ}彼の^よ呼ぶを^き聞かん、^{われすで}我既に^{くるしみ}苦を^う受けん^{ため}爲に^{ちじょう}地上の^{のぼ}イエルサリムに^{あら}上るに^{すなわち}非ず、^わ乃^{ちち}我が父

^{およ}及び^{なんじら}爾等の^{ちち}父、^わ我が^{かみ}神及び^{なんじら}爾等の^{かみ}神に^{のぼ}升り、^{なんじら}爾等をも^{とも}偕に^{てんじょう}天上の^{てん}イエルサリム、^{くに}天の國

に^あ擧げん。

第五調

句 ^{ラッパ}角の^{こえ}聲を^{もつ}以て^{かれ}彼を^ほ讃め^あ揚げよ、^{きん}琴と^{しつ}瑟とを^{もつ}以て^{かれ}彼を^ほ讃め^あ揚げよ。

^{しんじゃ}信者よ、^{われら}我等^{かみ}ハリストス神の^{すくい}救を^{ほどこ}施す^{くるしみ}苦に至りて、^{かれ}彼の^い言ひ^{がた}難き^{にんたい}忍耐を^{さんえい}讃榮せん、^{かれ}彼が

^{しぜん}至善にして^{ひと}人を^{あい}愛する^{しゅ}主なるに^よ因りて、^{その}其^{じれん}慈憐を^{もつ}以て^{つみ}罪に^{ころ}殺されたる^{われら}我等をも^{とも}偕に^{おこ}起さん^{ため}爲

なり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

主よ、爾 苦 に往く時 爾 の門徒を堅め、獨 彼等を招きて曰へり、何ぞ我が前に 爾 等に言

ひし我の言を記念せざる、凡そ預言者がイエルサリムの中に非ずして殺さるることは録せ

るなし、今や我が 爾 等に言ひし時届れり。蓋 視よ、我罪人等の手に付されて辱しめられ

ん、彼等我を十字架に釘し、瘡 に付し、死者の如く悪むべき者とせん、然れども勇めよ、

蓋 我第三日に起きて、信者の 喜 且永生と爲らん。

<戻る 17頁>

<増連禱の後>

◆挿句の讃頌 第五調

主よ、ゼワエデイの子の母は 爾 が定制の言ひ難き奥義に堪へずして、 爾 に向ひて其二子に

現世の國の尊貴を賜はんことを求めたり、然れども 爾 は此に代へて、 爾 の友に死の 爵 を

の飲まんことを約せり、彼等に先だちて 爾 自ら此の 爵 を諸罪の潔として飲まんと言へり、

故に我等 爾 に籲ぶ、我が 靈 の救よ、光榮は 爾 に歸す。

句 主よ、夙に 爾 の 憐 を以て我等に飽かしめよ、然せば我等 生涯 歡び樂しまん。 爾 我等

を撲ちし日、我等が 禍 に遭ひし年に代へて、我等を樂しましめ給へ。願はくは 爾 の工作は

爾 の諸僕に 著れ、 爾 の光榮は其諸子に 著れん。

主よ、 爾 は門徒に最完全なる事を謀るべきを教へて、下なる者の上に權を執ることに於て

異邦民に效ふべからざるを云へり、 爾 等我の門徒に於ては斯くある可からず、蓋 我は甘ん

じて貧しき者と爲れり、 爾 等の中に 首たる者は衆人の僕と爲るべし、 司る者は 司ら

る者の如く、 尊き者は卑き者の如くなるべし、蓋 我親ら貧しくなりたるアダムに役し

て、我が 命 を與へて、光榮は 爾 に歸すと我に呼ぶ衆くの者の 贖 を爲さん爲に來れり。

句 願ねがはくは主しゅ吾わが神かみの恵めぐみは我等われらに在あらん、願ねがはくは我わが手ての工わざ作われらを我等たすに助たまけ給わへ、我わが
手ての工わざ作たすを助たまけ給たまへ。

第八調

兄弟けいていよ、果みを結むすばざるに因よりて枯かれたる無いちじく花こらし果おそ樹われらの懲かいかい戒かなを懼みれて、我むす等われら悔おおい改あわれみに合たまふ果たてまつを結らん。

光こう榮えいは父ちちと子こと聖せい神しんに歸きす、今いまも何いつ時よよも世よ世よに、「アミン」。

蛇へびは第だいに二にのエエワとしてエエギエプトの婦おんなを獲えて諛へつらいの言ことばを以もつてイイオイシシフを踏つまづかしめんと務つとめ
たり、然しかれども彼かれは衣ころもを遺のこして罪つみを避さけ、裸らたい體はにして耻はぢはじめざりき、始つに造ひとられたる人いはんの違い反はん
の前さきの如ごとし、ハかれリきとうスよ、彼われらの祈あわれ禱たまに因たりて我われら等あわれを憐たまみ給たまへ。

<戻る 19頁>

一時課、三時課共通

◆小讃詞 第八調

イうアなコこうとくフものはイくるまオざシおフうを亡ごとひて哭うやまけるに、高お徳うの者うやまは車うやまに坐うやまして、王うやまの如うやまくに敬うやまはれたり、
蓋けだし彼かの時ときエおんなギよくプトふくえきの婦おんなの慾よくに服ふくえき役せずして、人ひとの心こころを知しりて不ふ朽きゆうの冠かんむりを賜たまふ者ものより榮えい
せられたり。

六時課

◆預言の讃詞、第六調。

世せ界かいの救きゆう主しゅよ、我われら等いた傷たましいめる靈もつを以なんじて爾ふくはいに伏なんじ拜いのして、爾けだしに祈なんじる、蓋つう爾かいは痛もの悔かみする者かみの神かみ
なり。

司つ祭つし 謹きみて聽きくべし。

誦よ經き ポポロロキキメン、 (第四調。第百二十五聖詠)

する^{ところ}所には、彼等^{かれら}彼處^{かしこ}に往^ゆけり、其^{その}往^ゆく時^{とき}轉^{まわ}らざりき。其^{その}生物^{いきもの}の状^{さま}は熱^やくる炭^{すみ}の如^{ごと}く、燃^もゆ
 る^{とも}燈^{しび}の如^{ごと}し、火^ひは生物^{いきもの}の^{あいだ}間^{ゆきかえり}に往^ゆ返^{かえり}し、火^ひ輝^{かが}きて、其^{その}中^{うち}より^{いな}電^{ずまい}出^いでたり。生物^{いきもの}は馳^はせ
 て往^ゆ來^きす、^{いな}電^{ずまい}の^{ひらめ}閃^{ごと}くが如^{ごと}し。我^{われ}生物^{いきもの}を見^みしに、視^みよ、地^ち上^{じょう}に、生物^{いきもの}の^{かた}旁^{わら}に、其^{その}四^{よつ}の^{おも}面^て
 の^{まえ}前^{おのおの}に、各^{おの}一^{ひとつ}の^わ輪^{りん}あり、其^{その}輪^わの^{さま}状^{みな}がら皆^{あま}徧^ねく目^めあり。生物^{いきもの}の^ゆ行^{とき}く時^{とき}は、輪^わ其^{その}旁^{かた}に^わ行^ゆき、
 生物^{いきもの}地^ちより^あ擧^ある時^{とき}は、輪^わも亦^{また}擧^あれり。神^{しん}の^ゆ往^{ほつ}かんと欲^{ほつ}する^{ところ}所^かには、彼^{かれ}等^らも^{かしこ}彼^ゆに^{しん}往^{しん}けり、神^{しん}
 何^{いづれ}に^ゆ往^わくとも、輪^わも^{かれら}彼^{ならび}等^あに^あ並^あびて^あ擧^あれり、蓋^{けだ}生物^{しい}の^{しん}神^わは^{うち}輪^あの中^あに^あ在^ありき。

司祭 謹みて聽くべし。

誦經 ポロキメン（第四調 第二百二十六聖詠）

若し^も主^{しゅ}家^{いえ}を^{つく}造^{つく}ら^{もの}ず^{いた}ば、^{らう}造^{らう}る^{らう}者^{らう}徒^{らう}に^{らう}勞^{らう}す。（詠） 若し^も主^{しゅ}家^{いえ}を^{つく}造^{つく}ら^{もの}ず^{いた}ば、^{らう}造^{らう}る^{らう}者^{らう}徒^{らう}に^{らう}勞^{らう}す。

（句） 若し^も主^{しゅ}城^{しろ}を^{まも}守^{まも}ら^{もの}ず^{いた}ば、^{けい}守^{せい}る^{せい}者^{せい}徒^{せい}に^{せい}儆^{せい}醒^{せい}す。（詠） 繰^{せい}り返^{せい}す

誦經 若し^も主^{しゅ}家^{いえ}を^{つく}造^{つく}ら^{もの}ず^{いた}ば、（詠） 造^{つく}る^{もの}者^{いた}徒^{らう}に^{らう}勞^{らう}す。



嗣ぎて司祭四福音經中の某章を讀む。

<戻る 44頁>

六時課、九時課共通

◆小讚詞 第八調

イアコフはイオシフを^う亡^{しな}ひて^な哭^なけるに、高^{こう}徳^{とく}の^{もの}者^{もの}は^{くる}車^まに^ぎ坐^おして、王^{おう}の^{ごと}如^うくに^{やま}敬^うはれたり、
 蓋^{けだ}彼^かの時^{とき}エギ^{おん}ペ^なトの^{よく}婦^ふの^{ふく}慾^{えき}に^{ひと}服^{ひと}役^こせず^{ころ}して、人^しの^ふ心^{きゆう}を^{かん}知^むりて^{たま}不^も朽^{えい}の^{えい}冠^{えい}を^{えい}賜^{えい}ふ者^{えい}より^{えい}榮^{えい}
 せられたり。

晩 課

◆「主や爾によぶ」を一調で歌う

主や 汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や
 われに聞きたま え 主や汝に呼ぶすみやかに我れに
 いたりたまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたま え
 主やわれに聞きたま え ねがわくはわがいのりは
 香炉かろうのかおりのごとく 汝がかんばせのまえにのほり
 わが手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん 主や
 われにききたま え

誦経 主よ、我が口くちに衛まもりを置き、我が唇くちびるの門もんを扞ふせぎ給へ、我が心こころに邪よこしまなる言ことばに傾かたがきて、不法ふほうを行おこなふ人ひとと共に、罪つみの推いい諉わけせしむる母なかれ、願ねがはくは我われは彼らかれの甘味あまみを嘗なめざらん。

義人ぎじんは我われを罰ばつすべし、是れ矜恤きようじつなり、我われを譴せむべし、是れ極こと美いしき膏うるわ我が首あぶらを悩なす能あたはざる者ものなり、唯ただ我がいのり祈かれらは彼等あくじの悪事てきに敵かれらす。彼等しゅちやうの首長わは巖石いわおの間に散あいだじ、我わが言ことばの柔和にゆうわなるを聴きく。我等われらを土つちの如ごとく斫きり碎くだき、我わが

ほね じごく くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんじ あお われなんじ たの
骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が自は爾を仰ぎ、我爾を恃む、
わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゅ あみ われ まも たま
我が靈を退くる母れ。我が爲に設けられし竝、不法者の羅より我を護り給
へ。ふけんしゅ おのれ あみ かか ただわれ す
へ。不虔者は己の網に羅り、唯我は過ぐるを得ん。

<続いて自調の讃頌を歌ふ、 第1調>

わ たましい ひとや ひ いだ われ なんじ な さんえい たま
句 我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讃榮せしめ給へ。

しゅ じゆう くるしみ ゆ とき とちゆう しと ら い み われら のぼ ひと こ
主は自由の苦に往く時、途中使徒等に謂へり、視よ、我等イエルサリムに上る、人の子は
わた くれ さ する ごと きた われら きよ おもい もつ くれ とも
付されん、彼を指して録されしが如しと。來りて、我等も潔められたる思を以て彼と偕に
ゆ とも じゅうじか てい くれ ため せじょう いつらく し しか われら くれ とも またい
行き、偕に十字架に釘せられ、彼の爲に世上の逸樂に死なん、然らば我等彼と偕に復活きて、
くれ よ き われすで くるしみ う ため ちじょう のぼ あら すなわち わ ちち
彼の呼ぶを聞かん、我既に苦を受けん爲に地上のイエルサリムに上るに非ず、乃我が父
およ なんじら ちち わ かみおよ なんじら かみ のぼ なんじら とも てんじょう てん くに
及び爾等の父、我が神及び爾等の神に升起、爾等をも偕に天上のイエルサリム、天の國
あ
に擧げん。

第五調

なんじおん われ たま とき ぎじん われ めぐ
句 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

しんじゃ われら かみ すくい ほどこ くるしみ いた くれ い がた にんたい さんえい くれ
信者よ、我等ハリストス神の救を施す苦に至りて、彼の言ひ難き忍耐を讃榮せん、彼が
しぜん ひと あい しゅ よ その じれん もつ つみ ころ われら とも おこ ため
至善にして人を愛する主なるに因りて、其慈憐を以て罪に殺されたる我等をも偕に起さん爲
なり。

しゅ われふか ところ なんじ よ しゅ わ こえ き たま
句 主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

しゅ なんじくるしみ ゆ ときなんじ もんと かた ひとり くれら まね い なん わ さき なんじら い
主よ、爾苦に往く時爾の門徒を堅め、獨彼等を招きて曰へり、何ぞ我が前に爾等に言ひ
われ ことば きねん およ よげんしゅ うち あら ころ する
し我の言を記念せざる、凡そ預言者がイエルサリムの中に非ずして殺さるることは録せる
いま わ なんじら い ときいた けだし み われざいにんら て わた はずか
なし、今や我が爾等に言ひし時届れり、蓋視よ、我罪人等の手に付されて辱しめられん、

かれら われ じゅうじか てい ほうむり わた ししゃ ごと にく もの しか いき けだしわれ
彼等我を十字架に釘し、瘞に付し、死者の如く悪むべき者とせん、然れども勇めよ、蓋我

だいさんじつ お しんじや よろこびかつせいせい な
第三日に起きて、信者の喜且永生と爲らん。

ねが なんじ みみ わ いのり こえ き い
句 願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

しゅ こ はは なんじ ていせい い がた おうぎ た なんじ むか そのにし
主よ、ゼラエデイの子の母は爾が定制の言ひ難き奥義に堪へずして、爾に向ひて、其二子

げんせい くに ぞんき たま もと しか なんじ これ か なんじ とも し さかずき
に現世の國の尊貴を賜はんことを求めたり、然れども爾は此に代へて、爾の友に死の爵

の やく くれら さき なんじみずか こ さかずき しょざい きよめ の い
を飲まんことを約せり、彼等に先だちて爾自ら此の爵を諸罪の潔として飲まんと言へ

ゆえ われら なんじ よ わ たましい すくい こうい なんじ き
り、故に我等爾に籲ぶ、我が靈の救よ、光榮は爾に歸す。

ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく くれ あが ほ
句 萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

しゅ なんじ もんと いかんぜん こと はか おし しも もの うえ けん と おい
主よ、爾は門徒に、最完全なる事を謀るべきを教へて、下なる者の上に權を執ることに於て

いほうみん なら なんじら われ もんと おい か べ けだしわれ あま
異邦民に效ふべからざるを云へり、爾等我の門徒に於ては斯くある可からず、蓋我は甘ん

まず もの な なんじら うち かしら もの しゅうじん ぼく な つかさど もの つかさど
じて貧しき者と爲れり、爾等の中に首たる者は衆人の僕と爲るべし、司る者は司ら

もの ごと とうと もの ひく もの ごと けだしわれみずか まず えき
る者の如く、尊き者は卑き者の如くなるべし、蓋我親ら貧しくなりたるアダムに役し

わ いのち あた こうい なんじ き われ よ おお もの あがない な ため きた
て、我が命を與へて、光榮は爾に歸すと我に呼ぶ衆くの者の贖を爲さん爲に來れり。

第八調

けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが そんな
句 蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

けいてい み むす よ か いちじく こらし おそ われら かいがい かな み むす
兄弟よ、果を結ばざるに因りて枯れたる無花果樹の懲戒を懼れて、我等悔改に合ふ果を結び

われら おおい あわれみ たま たてまつ
て、我等に大なる憐を賜ふハリストスに獻らん。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

蛇は第二のエワとしてエジプトの婦を獲て、諛の言を以てイオシフを跌かしめんと務めたり、然れども彼は衣を遺して罪を避け、裸體にして耻ぢざりき、始に造られたる人の違反の前の如し、ハリストスよ、彼の祈禱に因りて我等を憐み給へ。



光 栄は父と子と聖神に帰す、いまも いつも 世— 世にアミン



へびは第2の エヴァとして、 エジプトの 女を 得て、



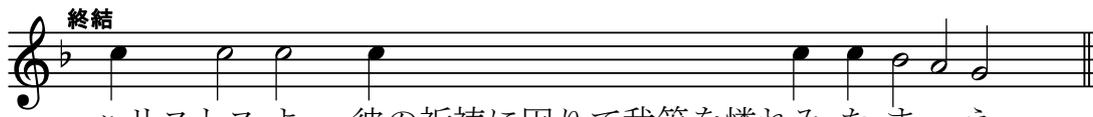
へつらいの言を以てイオシフを躓かしめんと つとめた一り。



然れども彼は衣を残して 罪を 避— け、裸体にて 恥 ざりき、



始めに作られたる日との 違反の さきの ごと— し、



ハリストス よ、 彼の祈祷に因りて我等を憐れみ たま— え。

<戻る 聖にして福たる>

輔祭 謹みて聴くべし。

司祭 衆人に平安。

輔祭 睿智、謹みて聴くべし。

誦經 ポロキメン、(第六調 第二百二十七聖詠)

主はシオンより 爾に降福せん、 爾在世の諸日イエルサリムの安寧を視ん。(詠)繰り返す



主はシオンより降福せん、爾在世の諸日イズライリの 安寧を見ん

誦經 (句) 凡そ主を畏れて其途を行く者は 福なり。(詠)繰り返す

誦經 主はシオンより 爾に降福せん、(詠) 爾在世の諸日イエルサリムの安寧を視ん。

輔祭 睿智。

誦經 エギプトを出づる記の讀。 一章一至二十節

輔祭 謹みて聽くべし。

誦經誦す、

イズライリの諸子、其父イアコフと偕にエギプトに入りし者の名は左の如し、各其全家と偕に入りたり、ルワイム、シメオン、レワイイ、イウダ、イッサハル、ザワウロン、ウェアミン、ダン、ネファリム、ガド、アシルなり。イオシフは既にエギプトに在りき。イアコフより出でたる者は總て七十五人なり。イオシフと、其諸兄弟と、當世の人と皆死せり、イズライリの諸子は饒く子を生子、愈増し、愈殖え、太甚しく強くなりて、其地に充つるに至れり。茲にイオシフの事を知らざる新しき王エギプトに起れり、彼其民に謂へり、視よ、イズライリの諸子の族は多數にして、我等よりも強し、來れ、我等巧なる計を以て彼等を待はん、恐らくは彼等益多くなり、戦争の興ることある時は、我等の敵に與し、我等に勝ちて、此の地より出でんと。乃役を督る者を彼等の上を立てて、重き役を以て彼等を疲らせたり。彼等はファラオンの爲に堅固なる邑ピフォ、ラメッシ、及びラン、即エリオポリを建てたり。然れども愈彼等を窘むるに随ひて、彼等愈増し、愈強くなりて、エギプト人イズライリの諸子を懼るるに至れり。故にエギプト人は厳しくイズライリの諸子を勞働せしめ、和泥、作輒の苦役、田圃の諸の工作、凡そ酷く彼等に爲さしむる力役を以て彼等の度生を苦しくせり。又エギプト王はエウレイの産婆に謂へり、其一の名はセプフォラ、一の名はファナリ、之に謂へり、爾等エウレイの婦女の爲に収生を爲す時は、其産を見て、若し男子ならば之を殺せ、女子ならば之を存せよ。然れども産婆は神を畏れ、エギプト王の彼等に命ぜし如く爲さずして、男子を存せり。エギプト王産婆を召して彼等に謂

えり、爾等何ぞ此の事を爲して、男子を存する。産婆ファラオンに謂えり、エウレイの婦

はエギプトの婦の如くならず、彼等健にして、産婆の彼等に入らざる先に産み畢るなり。

此に縁りて神は産婆に恩を施せり、而して民愈増して甚強くなれり。

輔祭 謹みて聴くべし。

誦經 ポロキメン、(第六調。 第二百二十八聖詠)

我等主の名を以て爾等を祝福す。(詠)繰り返す

(句) 我が幼き時より彼等多く我を攻めたり。(詠)繰り返す

誦經 我等主の名を以て、(詠) 爾等を祝福す。



其後輔祭高降にして曰く、

命ぜよ。

司祭兩手に香爐及び火を點じたる燭を執り、聖寶座の前に立ち、

東に嚮ひて、聖號を畫して曰く、

睿智、肅みて立て。

嗣ぎて西に轉じて、衆に向ひて曰く、

ハリストスの光は衆人を照す。

誦經 イオフ書の讀。 一章一至十二節

輔祭 謹みて聴くべし。

誦經、アウシティディヤの地に名はイオフと云う者ありき、其の人無玷、公義、篤實、敬虔

にして、凡その惡に遠ざかれり。其生める者は男子七人、女子三人、其家畜は羊七千、駱駝

三千、牛五百耦、牝驢馬五百、其僕從甚多し、地上に大なる業を爲せり、此の人は東

の中に最大なる者たりき。其男子は各己の家に順次宴を設けて、日に相集り、三人

の姉妹をも招きて、共に食飲せり。其 宴 の日の一周する毎に、イオフ使して子を集め、
彼等を潔めたり、即 夙に興きて、彼等の數に循ひて、彼等の爲に燔祭を獻げ、又一の牛
を彼等衆の 靈の罪の爲に獻げたり。蓋イオフ曰へり、或は我が諸子は罪を犯し、神に對
して其心に悪しき事を念ひしならんと。イオフの爲しし所は恒に此くの如し。一日神の
使等來りて主の前に立てるに、ディアウォルも彼等と偕に來れり。主はディアウォルに謂え
り、爾何處より來れる。ディアウォル主に答へて曰えり、地を巡り、天下を過ぎて、斯に在
り、主はディアウォルに謂えり、爾意を用いて我が僕イオフを觀しか、蓋地上に彼の若き
者なし、無玷、篤實、敬虔にして、凡その惡に遠ざかれる人なり。ディアウォル答えて主に
謂えり、豈イオフは獲る所なくして神を尊むか、爾は彼及び其家、又其一切の所有の四周
に藩籬を設けしに非ずや、其手の業は、爾之を祝し、其家畜は、爾之を地に蕃殖せしめ
たり。然れども爾の手を伸べて、凡そ彼の有てる物に觸れよ、其時彼豈爾を祝讚せんや。
是に於て主はディアウォルに謂えり、視よ、我彼の一切の所有を爾の手に與ふ、唯彼の身に
觸るる母れ、ディアウォル乃主の前より出でたり。

<「願わくは我が祈りは」歌う 61 頁>

睿智、肅みて立て、聖福音經を聽くべし。

嗣ぎて衆人に平安。

詠隊 爾の神にも。

輔祭 マトフェイに因る聖福音經の讀。 二十四章三至二十五節

詠隊 主よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

司祭 謹みて聴くべし。

輔祭誦す、

彼の時イイスス橄欖山に坐せるに、門徒私に彼に就きて曰へり、請ふ、我等に告げよ、何
の時に此の事あらん、又爾の降臨と世の終末との兆は如何なるか。イイスス彼等に答へて
曰へり、慎みて人に惑はさるる勿れ。蓋多くの者は我が名を冒して來り、我はハリストス
なりと云ひて、多くの者を惑はさん。又爾等戦と戦の風聲とを聞かん、慎みて懼る
る勿れ、蓋此れ皆有るべし、惟此れ尚末期には非ず。蓋民は民を攻め、國は國を攻めん、
饑饉、疫病、地震處處に在らん。此れ皆苦難の始なり。其時人爾等を艱苦に付し、爾
等を殺し、爾等我が名の爲に萬民に憎まれん。其時多くの者は躓き、相付し、相憎まん。
又多くの偽預言者起りて、多くの者を惑はさん。不法の増すに因りて、多くの者の愛は冷
にならん。惟終に至るまで忍ぶ者は救はれん。又此の天國の福音は徧く天下に傳へられん、
萬民に證を爲さん爲なり、然る後末期至らん。故に爾等預言者ダニイルを以て言はれたる
荒廢の憎むべき物の聖處に立つを見ば、(讀む者悟るべし、)其時イウデヤに在る者は山に
遁るべし、屋の上に在る者は、其家より物を取らん爲に、下るべからず、田に在る者は、其
衣を取らん爲に、歸るべからず。當日には妊める者と乳を哺まする者と禍なる哉。爾等
の遁ぐることの冬或は安息日に在らざらん爲に祈れ。蓋其時大なる患難あらん、世界の
始より今に至るまで、未だ此くの如きはあらざりき、後も亦あらざらん。若し其日減ぜられ
ずば、凡の肉身の救はるる者なからん、然れども選ばれたる者の爲に其日減ぜられん。其時
若し人爾等に告げて、視よ、ハリストス此に在り、或は彼に在りと云はば、信ずる勿れ。蓋
偽ハリスト及び偽預言者起りて、大なる奇徴と奇蹟とを施し、若し能すべくば、選ばれた

物のまどいたみわれあらかじなんじらにいゆえもなんじらつめてみ
 る者をも惑はすに至らん。視よ、我預め爾等に言へり。故に若し爾等に告げて、視よ、
 かれのあいのものいだなかみかれみつつあいのものしん
 彼は野に在りと云ふ者あらば、出づる勿れ、視よ、彼は密室に在りと云ふ者あらば、信ずる
 なかけだしいなづまひがしはつにしひらめごとひとこきたまたかごと
 勿れ。蓋電の東より發して、西にまで閃くが如く、人の子の來るも亦是くの如くなら
 けだししかばねあところわしあつまそのひかんなんのちたちまちひくらつきそのひかりほどこ
 ん。蓋屍の在る所には、驚集らん。其日の患難の後、忽日は晦み、月は其光を施さ
 ほしてんおてんせいふるうごそのときひとこしるしてんあらわそのときちじょうしよぞく
 ず、星は天より隕ち、天勢は震ひ動かん。其時人の子の記號は天に現れん、其時地上の諸族
 なかなひとこけんのうおおいこうえいもつてんくものきたみかれそのてんしら
 は哭き哀み、人の子が權能と大なる光榮とを以て天の雲に乗りて來るを見ん。彼は其天使等
 おおいこえラッパともつかわかれらそのえらものしふうあつまてんこはて
 を大なる聲の筈と與に遣し、彼等は其選ばれたる者を四風より集めて、天の此の極より
 かはていたいちじくたとえまなそのえだすでやわらかはきざなんじらなつちか
 彼の極に至らん。無花果樹の譬を學べ、其枝已に柔にして、葉萌せば、爾等夏の近きを
 しかごとなんじらおよこれらことみときちかもんあしわれまことなんじら
 知る。是くの如く爾等凡そ此等の事を見ば、時の近くして、門に在るを知れ。我誠に爾等
 つぐこよいまゆこみななえてんちはいしかわことばはい
 に語ぐ、此の代未だ逝かずして、此れ皆成るを得ん。天地は廢せん、然れども我が言は廢せ
 ざらん。
 詠隊しゅこうえいなんじきこうえいなんじき
 主よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

晩堂大課

三歌頌 クリトのアンドレイの作 第八調

第二歌頌。「イルモス」

てんきわれつたどうていじよわれらすくいためうまつ
 天よ、聽け、我傳へて、童貞女より我等の救の爲に生れしハリストスを歌はん。

われらかみこうえいなんじきこうえいなんじき
 附誦 我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

ともエレオンざんゆしとらおなおうみつかれともお
 ハリストスと偕に橄欖山に往きて、使徒等と同じく奥密にして彼と偕に居らん。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

わけんびこころききいひきうすたとえなにさとこれき
 我が謙卑の心よ、ハリストスが先に言ひし磨白の喩の何なるを暁りて、是より醒めよ。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

ああ わ たましい おのれ せいせい そな げんせい しんぼんしゃ こうりん ちか
嗚呼吾が靈よ、己を逝世に備へよ、嚴正なる審判者の降臨は邇づく。

しせい しょうしんじょ われら すく たま
至聖なる生神女よ、我等を救ひ給へ。

しじょう しょうしんどうていじょ ひとりしゅう うた もの なんじ こ なんじ しょぼく ため いの たま
至浄なる生神童貞女、獨衆に歌はるる者よ、爾の子に爾の諸僕の爲に祈り給へ。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

み み われ かみ ばんゆう そんざい さき てんち そうぞう さき いっさい し もの まった ちち お
見よ、見よ、我は神、萬有の存在の先、天地の創造の先より一切を知る者なり、全く父に居
り、亦全く父を己の衷に有つ者なり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

われ ことば もつ てんまたち ぞうせい けだしちち とも あ かつことば もつ ばんぶつ たも われ ちち ことば
我は言を以て天又地を造成せり、蓋父と共に在りき、且言を以て萬物を持つ、我は父の言

ちえ ちから およ そのかたち かれ とも おこな かれ ひと おこな もの
と智慧と能力及び其像、彼と共に行ひ、彼と等しく行ふ者なればなり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

たれ とき さだ たれ よよ まも たれ ばんゆう さかい た これ うんこう むげん つね
孰か時を定め、孰か世を護り、孰か萬有の疆を立てて之を運行せしむる、無原にして常に

ちち とも あ こうせん ひかり うち あ ごと もの
父と共に在ること、光線が光の中に在る如き者にあらずや。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

ああ なんじ じんあい なん むりょう けだしなんじ われら うえ さだ おわり き
イイスよ、嗚呼爾の仁愛は何ぞ無量なる、蓋爾は我等に上より定められたる終の期を

つ そのとき かく あきらか そのよちよう しめ
告げ、其時を隠したれども、明に其預兆を示せり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

なんじ いっさい さと いっさい し けだしんせい おのれ うち ちち ゆう ところ まった
イイスよ、爾は一切を悟り、一切を識る、蓋神聖にして己の中に父の有する所を全く

たも またほんせい もつ おのれ うち ちち おなえいざい しん まった たも
有ち、亦本性を以て己の中に父と同永在の神を全く有つ。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

しゅざい しゅ よよ ぞうせいしゃ われら か ときそのせい こえ ちち えら しゅう てんごく よ もの
主宰・主、世の造成者よ、我等をも彼の時其聖なる聲、父の選びたる衆を天國に呼ぶ者を

き た たま
聴くに勝へさせ給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す。

むげん つく さんしゃ わか ゆいいちしゃ さん いてつ もの ちち こ せいしん ゆいいち かみ
無原にして造られざる三者、分れざる惟一者、三にして一なる者、父、子、聖神、惟一の神

よ、泥の口よりする歌を燄の口よりする者の如く納れ給へ。

今も何時も世世に、「アミン」。

どうていじよ なんじ かみ せい すまい あらわ けだしてん おう にくたい なんじ うち お しんみょう
童貞女よ、爾は神の聖なる居所と現れたり、蓋天の王は肉體にて爾の中に居り、神妙に

ひと かたち き うるわ もの い
人の像を衣て、美しき者として出でたり。

他の「イルモス」を歌ふ、

み み われ かみ むかし みんな ひ くれぬい うみ とお これ やしな これ
見よ、見よ、我は神、昔イスライリ民を引きて紅の海を過らしめ、之を養ひ、之をフ

アラオンの苦しき服役より拯ひし者なり。

嗣ぎて誦經誦す、

しゅあわれ
主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いてつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

セダレン 坐誦讚詞 第二調

ハリストス恩主よ、爾は慈憐に導かれて、甘んじて苦を受けん爲に往く、我等を諸難及

び地獄の定罪より免れしめんと欲すればなり、救世主よ、故に我等皆爾の尊き苦を

かしょう なんじ かざり かんよう さんえい
歌頌し、爾の限なき寛容を讚榮す。

詠隊歌ふ われら しゅ ほ あが ふ おが よよ うた ほ
我等主を讃め。崇め、伏し拜みて、世世に歌ひ讃めん。

第八歌頌「イルモス」

しよてん しよてん こうえい ほうざ ざ かみ た さんえい しゅ あが ほ かれ うた
諸天使と諸天よ、光榮の寶座に坐し、神として絶えず讚榮せらるる主を崇め讃め、彼を歌ひ

よよ ほ あ
て世世に讃め揚げよ。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

たましい なんじ そのしんせい もんと つ おわり き あらかじ し たしか き
靈よ、爾はハリストスが其神聖なる門徒に語げて、終の期を預め知らししを確に聞け

り、爾の終を知りて、今より自ら備へよ、逝世の時は届れり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

實を結ばざる靈よ、爾は悪しき僕の喩を知れり、畏れて賜を忽にする勿れ、爾が之を受けしは地に埋まん爲にあらず、乃貿易せん爲なり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

燈は光るべし、其油は溢るべし、其時の處女の親愛の如し、爾我が靈よ、其時ハリストスの宮の啓きたるに遇はん爲なり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

遁ぐること冬、或は安息日にと師は言ひて、當時の第七世の暴風を先見す、此の中に冬の如く終は至らん。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

閃く電の疾きが若く、斯く其時爾の主宰の彼の畏るべき降臨あらん、吾が靈よ、爾之を聞けり、今より務めて自ら備へよ。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

審判者が其時千千萬萬の天軍及び能力と偕に來り、衆が裸體にして立つ時に、吾が靈よ、何の畏懼、何の戰慄かあらん、哀い哉。

我等主なる父と子と聖神とを崇め讃めん。

惟一の神は三者にして、父は子たることに變ぜず、子も聖神の位に轉ぜず、乃各其位に属することを護る、我光なる神三者を世世に讃榮す。

今も何時も世世に、「アミン」。

神よ、生神女の祈に因りて、我等の祈禱を納れ、衆に豊に爾の慈憐を遣し、爾の平安を爾の民に與へ給へ。

第九歌頌。「イルモス」

やま おい りっぼうしゃ ひ およ いばら うち よしょう われら しんじや すくい ため えいていどうじよ
山に於て、立法者に火及び棘の中に預象せられたる、我等信者の救の爲にせし永貞童女の
さん われら や うた もつ あが ほ
産を、我等息めざる歌を以て崇め讃む。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

わ たましい なんじ しんばんしゃ おわり き よげん なんじ おし き せいせい ため おこない そな
吾が靈よ、爾は審判者が終の期を預言して、爾を訓ふるを聞けり、逝世の爲に行を備
へよ、無功の者として神に棄てられざらん爲なり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

ああ わ たましい いちじく おわり まな えだやわらか は きざ なつ ときちか なんじ これら
嗚呼吾が靈よ、無花果樹より終を學べ、枝柔にして葉萌せば、夏の時近し、爾も此等
み すで もん あ し
を見ば、已に門に在るを知れ。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

ハリストス神よ、爾の外他の者誰か爾の父を識る、又爾の外誰か時或は日を知る、蓋爾
うち ちえ ことごと たからそん
の中には智慧の悉くの寶存するなり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

そのとき ほうざ もう きろく ひら ぼんしゅう らたい た おこな こと ただ しょう
其時寶座は設けられて、記録は啓かれ、萬衆は裸體にして立ちて、行ひし事は糾さる、證
するもの うった もの けだし ばんじ かみ まえ あらわ
する者も訟ふる者もあらざらん、蓋萬事は神の前に露なり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

しゅう しんばんしゃ しんばん う ため ゆ ざ ざ もの つみ もの
衆の審判者は審判を受けん爲に往き、ヘルウィムの座に坐する者は罪せらるる者としてピ
ラトのまえ た いっさい くるしみ う ため ゆ たま すく ため
ラトの前に立ちて一切の苦を受けん爲に往き給ふ、アダムの救はれん爲なり。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

おおい しんせい われら ちか けだし ふつか のち しめ まつり
大にして神聖なる我等の「パスハ」は邇づけり、蓋二日の後とハリストスは示して、祭と
して ちち たずさ くるしみ ひ あらかじ しろ
して父に攜へられんとする苦の日を預め記す。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

きゅうせいしゅ はは なんじ じゅうじか かたわら た なんじ ふざ ほふ み よ かな かなわ
救世主よ、母は爾の十字架の側に立ちて、爾が不義に屠らるるを見て呼べり、哀い哉吾

が子よ、^{かな かない}哀い哉入らざる^{ひかり}光よ、^ひ日よ、^{しゅう こうえい ひかり かがや たま}衆に光榮の光を輝かし給へ。

光榮は父と子と聖神[°]に歸す。

嗚呼^{ああ}聖なる^{せい}惟一者^{ゆいいちしゃ}、^{さんい}三位にして^{ゆいいち}惟一なる^{しんせい}神性^{さんしやゆいいちしゃ}、^{かみ どうそん}三者惟一者たる^{わか}神^{こうえい}、^{わか}同尊にして^{こうえい}分れざる^{こうえい}光榮

よ、^{われら たましい}我等の^{しよなん}靈^{すく たま}を^{すく}諸難より^{たま}救ひ給へ。

^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世に、「アミン」。

ハリストスよ、^{なんじ はは いのり い}爾の母の^{その きとう よ}祈を^{せかい へいあん}納れて、^{こっけん かた なんじ}其^{こっけん}祈祷^{かた}に^{なんじ}因りて^{なんじ}世界^{なんじ}を^{なんじ}平安^{なんじ}にし、^{なんじ}國權^{なんじ}を^{なんじ}堅め、^{なんじ}爾^{なんじ}の

^{しよきようかい}諸^{いつ}教會^{あわ}を^{たま}一に^{たま}合せ給へ。

復「イルモス」を歌ふ、

山^{やま}に^{おい}於て、^{りつぽうしゃ}立法者^{ひおよ}に^{いばら}火^{うち}及び^{よしやう}棘^{われら しんじや}の中に^{すくい}預象^{ため}せられたる、^{えいていどうじよ}我等^{えいていどうじよ}信者^{えいていどうじよ}の^{えいていどうじよ}救^{えいていどうじよ}の^{えいていどうじよ}爲^{えいていどうじよ}に^{えいていどうじよ}せし^{えいていどうじよ}永貞^{えいていどうじよ}童女^{えいていどうじよ}の

^{さん}産^{われら や}を、^{うた もつ}我等^{あが}息^ほめざる^ほ歌^ほを^ほ以て^ほ崇^ほめ^ほ讃^ほむ。叩^ほ拜^ほ一^ほ次^ほ

小讚詞 第二調

我^わが^{ふとう}不^{ふとう}當^{ふとう}なる^{ふとう}靈^{たましい}よ、^{りんじゅう}臨^{りんじゅう}終^{りんじゅう}の^{りんじゅう}時^{りんじゅう}を^{りんじゅう}思^{りんじゅう}ひ、^{いちじく}無^{いちじく}花^{いちじく}果^{いちじく}樹^{いちじく}の^{いちじく}斫^{いちじく}らる^{いちじく}る^{いちじく}こと^{いちじく}を^{いちじく}懼^{いちじく}れて、^{おそ}爾^{なんじ}に^{あた}與^{あた}へら

^{タラント}れし^{つと}賚^{もち}を^{もち}務^{もち}めて^{もち}用^{もち}い、^{かつけいせい}且^よ徹^よ醒^よして^よ呼^よべ、^{ねが}願^{ねが}は^{ねが}く^{ねが}は^{ねが}我^{われら}等^{われら}は^{われら}ハ^{われら}リ^{われら}ス^{われら}ト^{われら}ス^{われら}の^{われら}宮^{みや}の^{みや}外^{そと}に^{とど}留^{とど}ま^{とど}らざ^{とど}ら

ん。